令和６年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　深町　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、６年生を対象として、令和６年４月１８日（木）に、「教科（国語、算数）に関する調査」、文部科学省が指定した日（４月１０日から４月３０日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

１．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）
①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　児童質問紙調査

児童質問紙調査
○　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

３．教科に関する調査結果の概要

⑴　全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

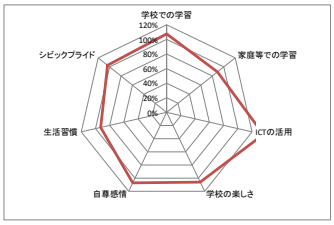
本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	9.6	60
全国	9.5	68	10.1	63

⑵　本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っていた。どの領域においても全国平均を下回っており、課題がある。しかし「情報の取り扱いに関する事項」は全国平均正答率に近いレベルであった。	全国平均正答率との比較：下回っている
	よくできた問題	話し言葉と書き言葉の違いに気づく問題。人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の有効を考えたりする問題。	
	努力が必要な問題	文の中における主語と述語との関係をとらえる問題。学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使う問題。	

算数	全体的な傾向や特徴など	全体的に全国平均正答率を下回っていた。どの領域においても全国平均を下回っており、課題がある。しかし「図形」「データの活用の２項目に関しては全国平均正答率に近いレベルであった。	全国平均正答率との比較：下回っている
	よくできた問題	除数が小数である場合の徐法の計算をする問題。道のりが等しい場合の速さについて、時間をもとに判断し、その理由を言葉や数を用いて記述する問題。	
	努力が必要な問題	球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立体の体積の求め方を指揮に表す問題。円グラフの特徴を理解し、割合を読み取る問題。	

４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



質問調査の結果分析

・「友達関係に満足しているか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいあるか」との問いに対して約95%の児童生徒が肯定的に回答している。多くの児童が良好な人間関係の中で学校生活を送っている。
・主体的・対話的で深い学びの充実と、児童生徒の自己有用感等に関連があるため、今後も学校全体で授業改善を進め、個に応じて児童一人一人が「わかった」「おもしろい」と実感できる授業にすることが必要である。
・「家庭学習においてICTを活用している」と回答した割合は前項平均の２倍以上も高かった。学校での活用が多いことを生かし、タブレットの取扱い方に気を付け、自分に合った学習課題を見付けて家庭学習に取り組んでいるためだと考えられる。
・土日の家庭学習の時間が時間が少なかった。ICTを１つの糸口として、学習時間を増やしていくことが課題である。

５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

①　教科に関する取組

○「わかる・できる」喜びを実感しながら、基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けるとともに、「もっと考えてみたくなる」「もっと表現してみたくなる」意欲を育てる。
○学習過程を工夫し、１時間の授業の中で基礎的・基本的な知識や技能の確実な定着を図る。

②　家庭生活習慣等に関する取組

○　宿題や家庭学習について
　①発達段階や個に応じた内容を再検討する。
　②「何をどう取り組めばよいか」自分自身の得意とつまずきを把握し、苦手克服にむけて取り組める力を育てる。
　③タブレットを活用したAIドリルでの学習調査・分析・表現を行う学習過程を繰り返し、広く学力を育てる。
○身近な人や地域の行事に対して積極的にかかわることができるようにするため、市民センターを中心とした連携を密にする。学校が地域と家庭をつなぐ活動や場を設定する。学校開放日に合わせて保護者や地域の方々が交流できるような場や活動の設定を行う。